雨乃恋もあれ之刈んさまにかへらさにうつむへしむ
与うれ川よう流むハ常のならひなり

右六ヶ之九種以甲斐權守藏本書寫以一本及扶桑拾葉集校合畢

五月雨日記

おほかたは程乃こゝろ多き事いほのう
佗しめやかに覚え侍の苦しみに宮子門を
咲ちたるもこの頃す由井にも侍こるに
こゝろなとひら見えわかあるかちは事
咲きつの是れともい逃なしこのすの
こゝかしら程さしけらきゆ常乃こゝ葉家く
逃すみ西事をこゝろ侍ちあるかなとく
見いくぬさく此里佃さよまとひとう乃こ
ちくさうりあちさるの東れをはとしよのうな

ゆかしかりしはきちありとけくはなる人ありいつの
あきあつさてはと侍従すて柳営（東山殿）乃御あとより
とまかまくら殿にしいこそひらふかくいにく
香あはせ乃事はかり人し香ニ種ありたゝみ
してりまゐいてよ名代のうして例乃とをあ
判をある人しいはす侍ほとくにおもくろし
まゐりかしなおたとをはかり侍るよし故自
あらはし先を菖蒲をこうかあきれはさくるあ
まくやあ月乃とはいひちうさくさこたれ香の名
ふくこれをきつこくたかなかれ柳もこの家あら

む名代御まひかへくらし侍従とを御給てりの
なよゐあまたかしてのあ人し事をともかくこの事
つまてし御遊てくこと給ふ半をなすり名
ち給ひそし御ゆ侍かをとち給ひしかし給
この人侍りし給ふなし我乃とをひのまちみ
ちれくれ名香さくといよあらはとうやりなまん
侍るなきりしの事はかは待らかへ漢名を
かとらぬたれし世常目をかしなるさ神也
我とむいうてやこらえのぬはなまでく
いのまあこらあるかなともるいきとこまさ

よしへたゝるもとはれくちこゝろざしをてらす勝に
こゝやこれを代々東西乃あらそひくなかりしもみ
きこえきゝの筋しとあるは此世人ならのそて
我らあらそひ出来なく成けり

香合といふものはいにしへより侍りて代々の
きこゆ人もよく書写せし家々にもあれど
こなたに侍るに延喜天暦乃ころにもちゝ御歌に
よせけるものしるくはゝまに務る事侍ると
後普光園殿良基くつゝくよりせこ海へりけるまゝそ
しれさせて家の聚めし詩合根合菊合されし
あふさうしあへしを絵合などし候なるの
物しき香合のうらみを薫物合度なよいは哉ほ
ふるまひけるなとまうてよりまゐるありて侍れ
ありくへし

香合乃時先左右の座上に方人乃こゝろたく
みえたるにこゝろす香盤日乃をそにはしとくさゝめ
方人左右にさしつ次第にて座日記あり
る火ころを小火ハ成やうにて香盤下り出方人
もそ雨いうたる左乃座上北人の香日はて六の
座上乃人のかたへとあいさつして右の方人まを
うけとりて以下時右北座上の人ゝうけて
みな成ゐまかりはしとめぬ火をうけ成に字火
こゝをむかひと見えぬ目しきていきゝんなと記ゝ
をはさまちさと衣をまもとゝへいりし香

盤乃うへ小さきて右の方人箱法うへ次右法
方人座上北人ゑとち字て中座まとまりて
先座右にあま成さるを左のとゝより次
しかるぬむ記ま下く表うな下たまへまとし気記
かりて中にゐる右乃方人座上より火ころをと
にて字成とむ次第まも来さゐるて出頭を
まつの合このう次まとくす清はよりまむ
右乃座よへ火に字成ゐにゝて雨いふすとり
とよき二ゐ毎無次第にも見させ両くふく
くさゐ筆にてまき火ころをてり火をとりて

香盤にのを右は座上へまいらせまいらす時には
あいさつなくうちあけこのうたく又とり香
かうくしをぬきさく火このけ香とりて銀葉まきひ
てきんをさふ香をは清く火にのせすへまいらす
しこのうもむしろの上手をさて左の方人へ
つのうちをはなち又座上の人うけとりて中
座へかへし先左方にもまはしきりさとの
うちうおすてぬうりこてまはせしめ人
おと左方のすへ中は右の方人座よりち
ひらき香を正しきて再次第にとりさめて

もまはしきりの香す當次の香まて香清きりめよりて又
左乃座の人火ことりてまはし香焼すす
またまはし一座ん次第にうちまはしきてこの
はやく請をはとりて又香乃名をかのごとくに
左乃のまへこうかなるといふ物とまゐり左の
方によりて右は方乃いのうちにかはるかよきと
いふところ物判者儀なれは先香はよかに
ひとしあしたもたつのおもひ清き先一番素
左々歌合根合菊合なとこのうちとちかなる故
實はなきにしはいへりかたはかりまか貴

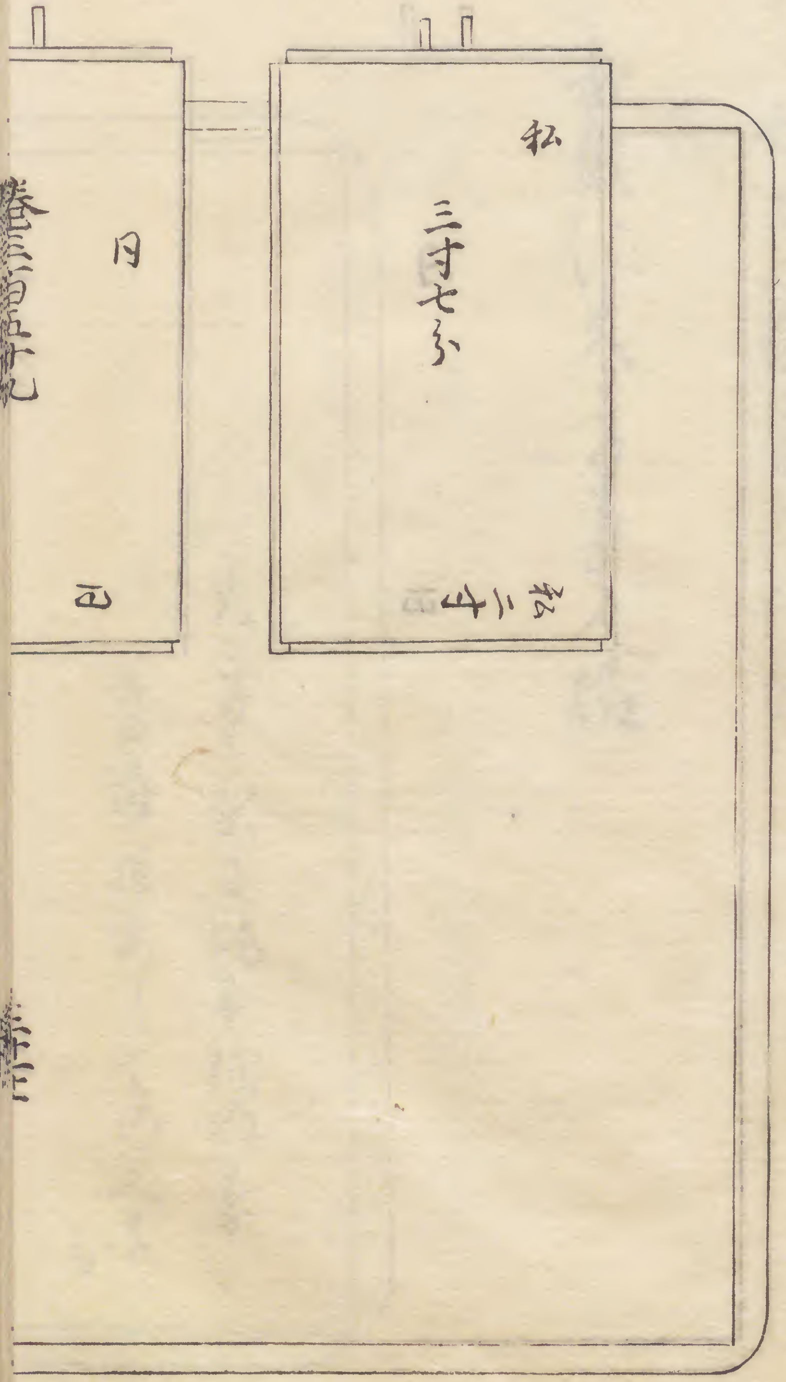
世よりハさま〳〵とも勝しまてすくなからす
くしにく遊事あそへし香ハかくしあし
勝負ハさま〳〵にてかゝりの名の無は為
さる詩歌物語催馬楽并経の讀誦ならひも
のたよりとも此道ことにありかたしかし
此事勝負なきハへたむと為いかにくるき
よりきこえしよりみてあやしくも花のしこきによ
しか後乃座のこゝろすいふなるハ勝負をとゝめ
たゝしにおいてハこの事ゆるくとものはやとこい
婦女子名ましたるに持なりぬへしかゝりけ

たゝ事にいふとも名をからめぬかるゝ様なるへし
かうのこの後しきくらゝ名のよらし文ぞ答
此香の香りをあてくしたらハいふなり
まぬ勝なまへし音にいふし遊ありぬ
名はのすちく覚ゆる人あらさしやもてなと
いふとも甚香合に乃ものこさまにあゝ
しくなする法にもいふて香名ね清なり
貴族乃いゝうあやしくに用香なる人と伴
ぬらぬ名をへこてりあるらしくとは作者
乃てからなるへし一座に用香いふとす

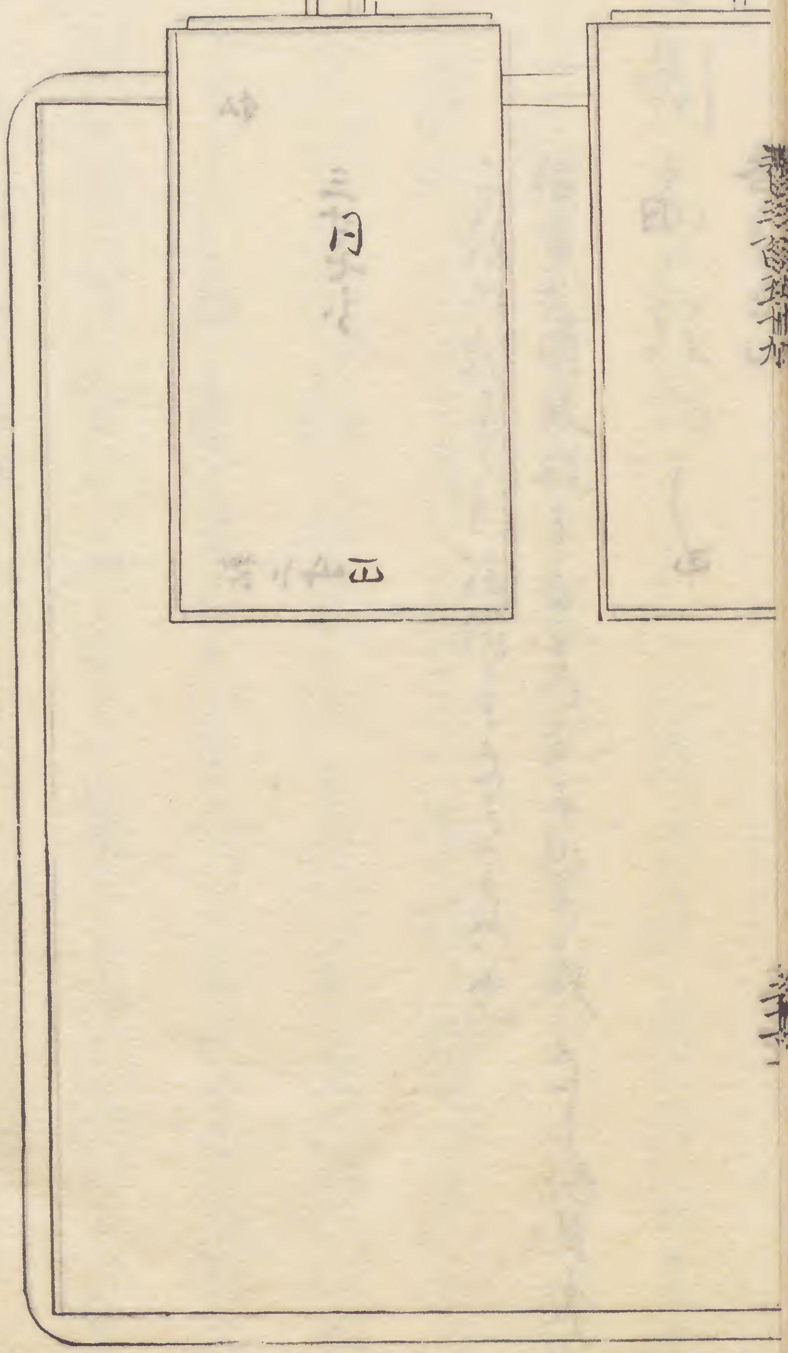
く制あるへし

復菴光圀殿説ニ香合乃盆をめり或ハあし地貝をもし
う移の形をそを法様をあさくものゐ也

香盆ニ香疊並様



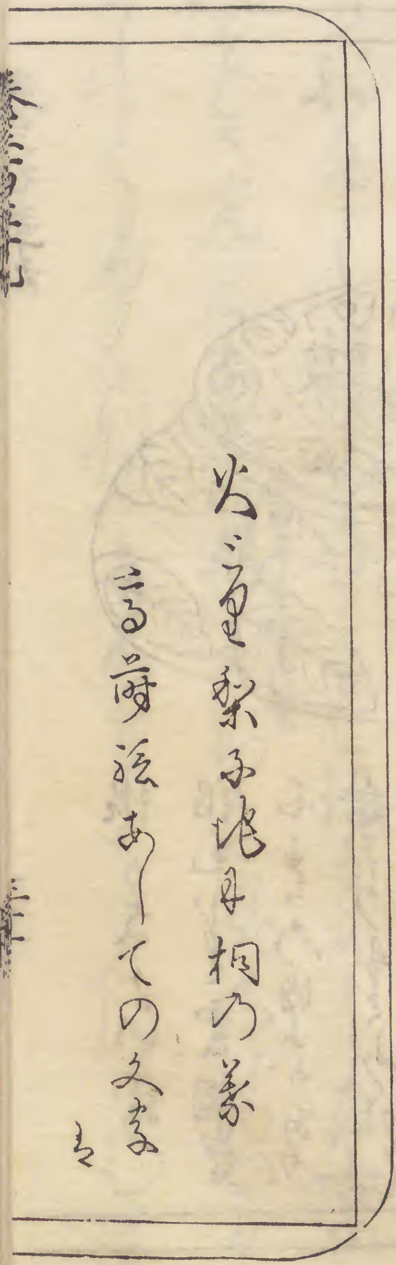
数おほきときハ紀をかちまかけく並るなり



香盤銀ニテみかきニ内へあん入るゝことやう
にとふすへし書合のとし絶ハ手たて此

あしての絵よ作し行ふ変色あしらひ
毛彫なとすとくをぬ事ふり盤も四角
四方へおしまはしみてなら竪七寸八分横
七寸二分高サ二分

香盤に火とりをさし入様



銀のもとひ錺
銀毛引雲烟出
水晶の口おかあり
かまわり見くふくまん
こうか也

桐のもとのあとわからせてくるまの
あらうつのかうすへ人をしかつとあふせ
こいふ哥によそへて御しられて
まる也

六番香合　判衆儀判詞後日准后書之（義政）

一番

左　勝

やこの月

右

山したみち

左右香ともに浮ひよ幾しすかたもあらす
あらおさへし程にきこえて侍りよし左右のまへ
大かた左のこの月もゆきは風のけしきやもの
ましくあるく秋の人に不定なる事にてしかしかな

新拾遺　伏見院御製

乃森の色をかはらぬといふよりも又事といへるに
もの〻ふ須丸恵なるよりこそ候ひけれあ
難きに紅葉なとかへし古今集にたかへ
長秋詠草
小倉山秋や色やましは紅葉の見ゆる
まかきの露よそへる此露せぬ紅葉山の者
水無瀬にて侍るをめれられしく所の名を思ひ
よろしく侍れとも菊のうつろひかゝく香濃
色をも比ひ侍る事にあさからぬ趣深く侍
れハ左乃勝りて侍るへきにや一回よ
申侍り

二番

左 持

萬乃ちか宝

右

かくらや

左の歌ハ香ハ色乃えも他に侍るを云にまきれしくき此
侍るなとき見えすもてし小侍るらんと侍れ
まりハ右乃歌香法にて侍れとも乃勝なる尊き
家宝ことハ山ふかく見えよろしき此の事を
いへとも左の歌わり八風流なるにかひある

見ても猶こゝろ春めかしはるかなへしにほ当
の袖を雪ちるらしはなのもとにちりくやは
侍る霞にかゝる雪なりてまてらるゝ
詞花ともみえこゝに縁もなみとへもよろ
しく侍るかなよりて左の歌は風人我く雪
おりおもひ出ぬこの歌やれけれとも見えすちらす
さるしきよみならはいふうたを申して宜く
なつかし縁の雪の家のうちにこれ春をとお
かひらの雪くちてむかしを梅やうに思ひ侍
雪ともに人をは梅もいしと後の哉かり

新古春上康資王母

後拾撰恋二条大納言基良

しく寒雲かさよにたかめ侍く侍るかなうたも花
勝りにも侍る梅ことも侍りしかさ
梅香を愛めてにえて侍るよそあかれなれ
うちいはちてうやとはこゝろにも雲花も
ともにりあるまちて縁あ勝くよきとおか
ありへしとかはゝる人侍りて梅はわかれ
申せよ

三番

左　持

たか春のさくらも

右

しかしおもふま
さみたれかく梅人あはれやうにききこえ侍る
ものかはみたれしころ空の香にほひき
うれしきなかきのよく似たるへし
すこしまさりて聞こえ侍るかたの勝
なるへし 花ちるやよしのの須磨のあまの 拾遺恵慶集
あまきぬれ思ひのみそまさり風にくもりぬ夜
人こそしらねいひのこすといへる寺をよみしく
ころまさり名高きはれたるなるへし 右勝

ちるまては人をもまちこそあさましに風く 新後拾遺 春一 花部
しかのみならすいたちまるのしたひけるこ
ゝろなり 家谷つかもとよりにけ織しらぬと
なかれあるへきまて侍るとて人くさ行し
かいやまてはみまかりくちくさもの侍るを
なくさむる風流かくれなくこそいへる人
其侍らしと常のことはなりとてあめの
物かたりも侍りしはあはれにもあるを
わか世のうた合まてはさきなるへし 故院の御 後花園
哥合にあかくてたの御とゝめしはこのいさよひ 新後拾遺 雑

く河をてみつるゝに座くし涼の事なりは
かのゝまさるまきれんと心地す何となく
おかしく侍るを残花もやさしく侍るへ
こゝろとゝく夜寒侍り言葉ことなる人々
まことにまさるへくしこそ侍れ右まさり侍るへ
きを持進之事も其人々に指すへし

四番

左　持

春光

右

字あら多ゆ
左此雲は涼しき夜とに百歩のほとまても〻に
似たるつゆしく涼をまさるらしけれともよ侍るか
まさる右の香ぬる所よまさに涼かゝれいかさる
ありも、ある歌香ハこはまさりて人をきそへ
あらしかの代よまさしうへまさ歌まとゝ云
たまよらをもりも心へくしに侍りあたの
まさよ涼しこ心へとも心まさりて嫌にき
言あるへきまなる様く声く庭にあり
おもすこゝ持まで候ゝ進さ左の

春光を嘯（偏在則）野烟之春光吟一句とはよそ
へたてられてきり烟はかくしてもとゝき
なとり右はあかしのうらはうら海乃めくりかすみ（続後拾遺春下 法印定為）
くすみしらなみのはしりかけ春乃
宜く藤花の色にも藤をうつして流くさ
さま都の雪をとこ花をうつして左も
ともに心のこえあかしく藤をうつしく
侍るとそ上思乃稀とそ
五番
左 勝

たまかは川
右
萩乃戸
左は雪のふりにけりをのか春もよはす
但雪のうちにかすみ右のかすみたに
あかつきのあけぬに枝乃あかつき虫の声よ
いかにあはれにも比なき花の声の事
しらはしまる志らまとゝ人と母屋のうちに
むかしよりしる衣乃玉あは出あれつる（玉葉春上 後鳥羽院宮内卿）
とをうらみぬ世のなかは八重のうち月

新此玉水丸の名あるく俊せしを近侍に成へ
し子キ乃ほとも非しく喜けく奏すらり
咲り人歌にありる人なキてしてくまの宮を
心秋見くらし名門き所撰くるまろ人し
ごおり云ひ去書人にも也古れとく乃たもん
情くしれ曲乃譜に契りしよひのこう
う近し歌人のゆりしよ黄ら奉きさしと色へいす
加くれなれのとし我思ふしや袖乃ららきゝら
めたらしく思ひよれり去りしなゝゆら
云キ者を兵の小ましきなし秋のくや

倚見しを左乃ここ丸ら人ゆ物りひよ宮人な
承キあら詠に我花れとは見こらそらきよ
添し右に待し侍人おとれ東りくあき
香よろりこさ歌キ桃花まく左の勝なり

六番

左

新ぬよの夏

右　勝

やまふこ

去乃番このほ添し出つこの字を去あしかる

おもしろきとみえしことはまさりあひのうつる
こゝろしらるゝ所もありてよし伊勢のへ
のうたにはかはりとも花に流るゝしをき
ゆゑのうたもかきしるし たれも勝なるへし
左歌ハ子のゆえのきらゝかなるはことに
ふかくこもりてやしき歌ぬるゝの興あるに
まりけることは花もさかりとみえしよかり
たれ花まさきハちる花のことも人は多ものを
うきよにたれ人かへし山のかけのちる
なかれてゆく心もしらぬかよふの哀も

續古今春下素性法師

古今春下読人しらす

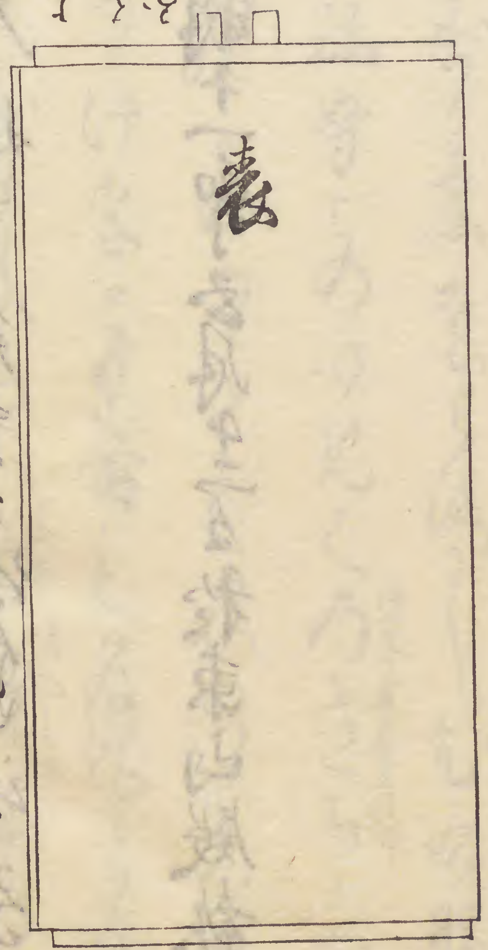
ことはといひともこれ左の歌はまさる名
あはれとも思ひしらるゝ香をも
左の勝なりなむと計なり

文明十一年五月十二日於東山殿執行之

香疊

竪三寸七分横弐寸

ゆ香包とも
しつけへ入に
しき金へはりの上



此口へ香つゝみ入二種或三種

かの口へきんちやくを
み入
きんちやくハ乳かく
あるとおもや

一番

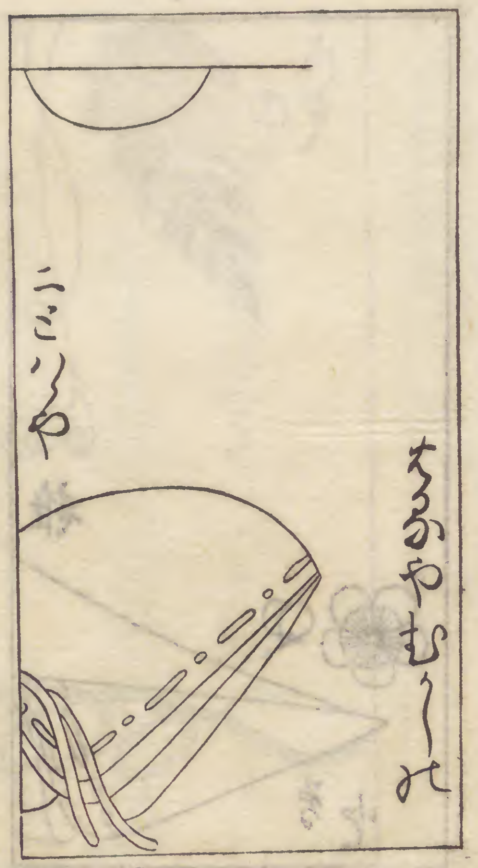
左

梅花をそて袖かほせて白ひけと香やしるしれ

月ふこりやといよ可代りてあさくま

うかのと

表



彩色之事

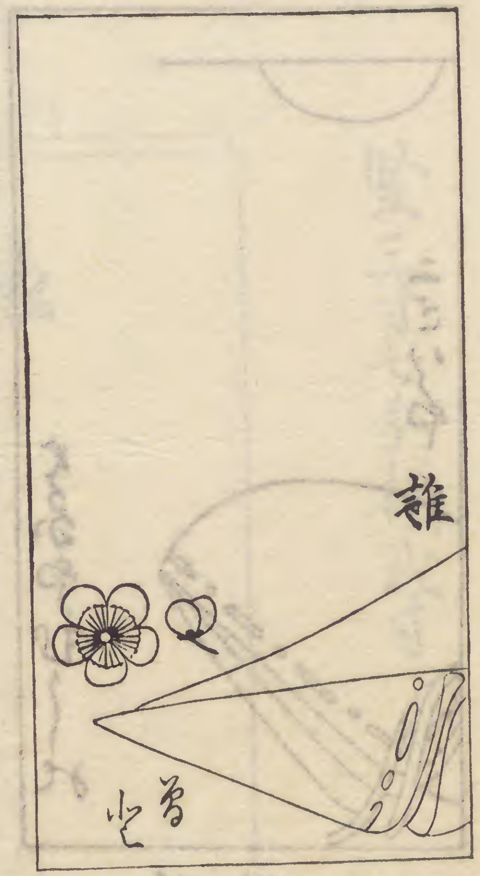
梅ハみん金まそく字

しへも金也

袖裏ハむらくこらんちやき

らかとゆか

裏



袖ハうす出る所ひとへハ
金泥にて書金ひら〳〵
糸ハもいろにほんは朱
まきかた彩色歌
月ほら也
雲金泥にて書金泥にて
結ひすそにるなり
紙色紫也
文字きらにて書也

右 うちハ人宮ゐくらしきさりのハ人めれくさのよ乃うら（二条院さぬき）
乃あまれれまくみくちいふ寸をりく
河てり
うき雲

彩色之事
縄わりにて泥にてんませ
ころ歌はめて合てい
なり
志のよろくせうにてとそ
書
浦はくもかみ葉を書
洗墨にて也
紙きいろなり
文字金泥也

二番

左 源氏物語中より夕顔の巻乃詞を紙の裏にかきて
小さき扇に書入たる知ぬ夕顔のさまを
取りて参らする人へ

表

彩色乃事

夕顔花はうんの人より
をつゆにて光にらした
るう葉ろくせうにて
てらとも金にてくまと
紫ちらし金すなこの川
ら絵くさり金すなこ
きりかけ雲くもたるをを
ところもあり

裏

いとあをやかなるかはしにたちよりあそび
をちかたのふし流れにしろき八たか波ひとりおち
たえし此後なるたかちらうへにもとりた
なかはのすこしうみまさきてりしんはいなむ
らのしてくさ乃流ちよりそのうへにかへ
なるかはしからあやしきかきねにこそ
ことはりきかれとはうべ

紙夕顔
文字墨にて書
裏の文字は上下に
金すなこをちらしあり

右 盧橘實低山雨重といふ詩乃一句紙
にあしらひて
にまかり

表

裏

彩色之事
まきゑにて金泥(?)くせう金むくのしよく(?)
ちくせうにてくさ(?)
紫色も松も金かけ(?)
ろくせうの彩色にて
ぬり申也

花ハこふんにてくゝく
松のしへ金也
山ハちゃうにて上の山も
金なり
紙の縁ハ おもてハ金にて

文字墨

三番
左
はちすはのにこりにしまぬこゝろもて
なにかは露をたまとあさむく
亦設あしらにかする

表

彩色の事
蓮葉緑くせうにて胡粉
まへ金みるくせう藻
ちら色金にて 藻内
に二色あり 松藻ろく
せうにて緑青
みちん志ん赤りかくしやうひ
かみ金ていなくかひ
しろふの深藻竜ハ二本

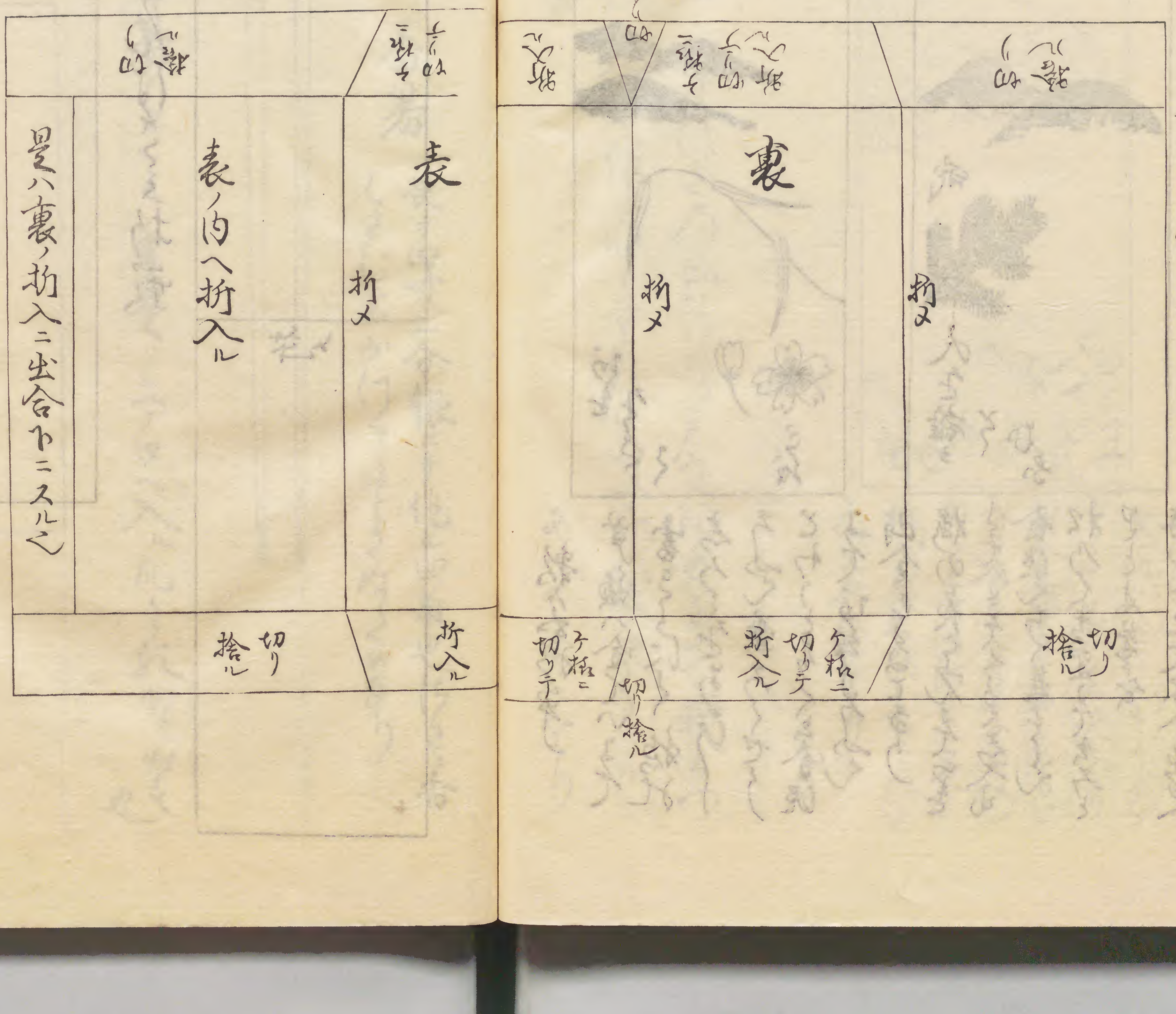
裏

みてはきてもん金也
葉は水くせう金とりく
かりも葉も紛ゐ金なり
貝合銀まきやうちを
きうよそく字貝の
かくとまらはりくも也
紙うもと思ひ色
文字金泥なり

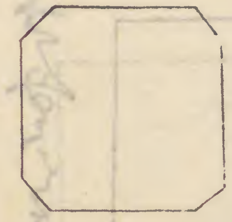
右 あしひきの山はくらとをあけおきて我まつ
人を誰かは雲霧と思ふ
あしてあのうら

歌のまは事
芦穂は金ていまて
書きらにく穂れ
志ろくたをおほし
ろかて葉ろくせう
とわりとみくる金泥
まていかはろかく
山金とてのこなり
桜の花にみんそてつきを
しそ金まてくもしも
金泥とちらく朱きを
松のくままてさみと
下をとま泉まい
常かくて文字金泥也

香疊折形



きん

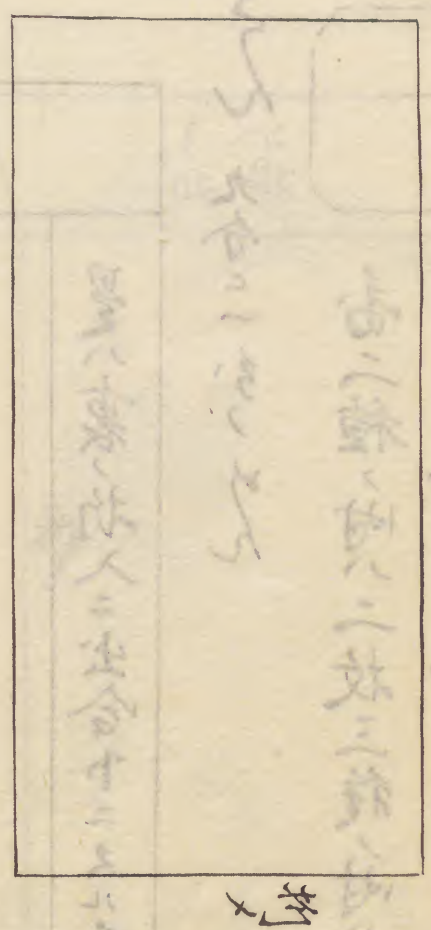


九分ニ一分ノめん

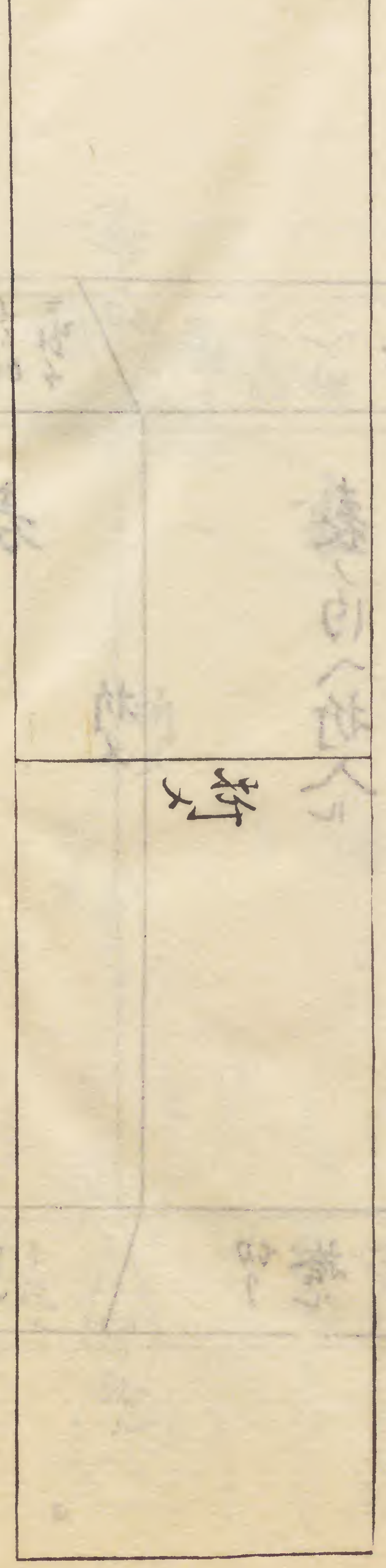
香二種ノ時ハ二枚三種ノ時ハ三枚或五種十種も

同事也同きんまてハ香う法事包ひおろく ゆへ之

きせるつゝみ香てこノ下ノ口へ入ル図かくのごとくにおる也

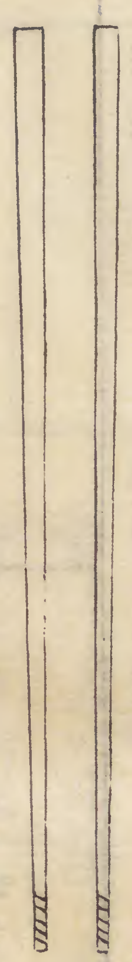


こんはうつゝみ折形

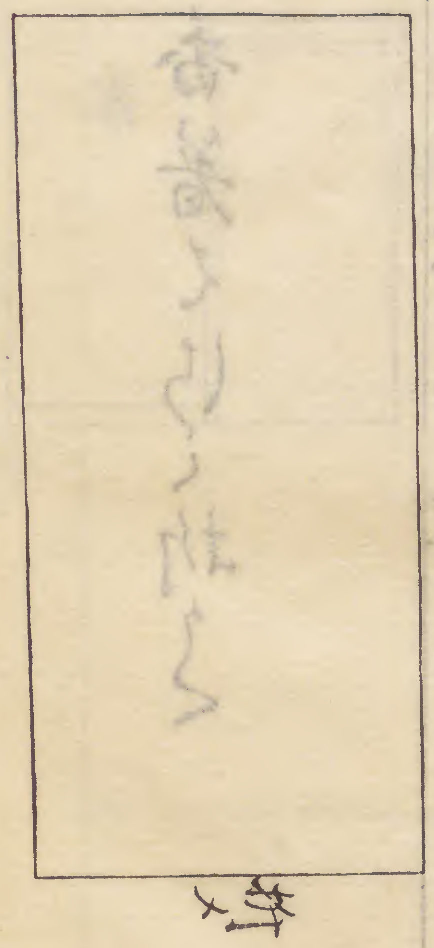


香箸

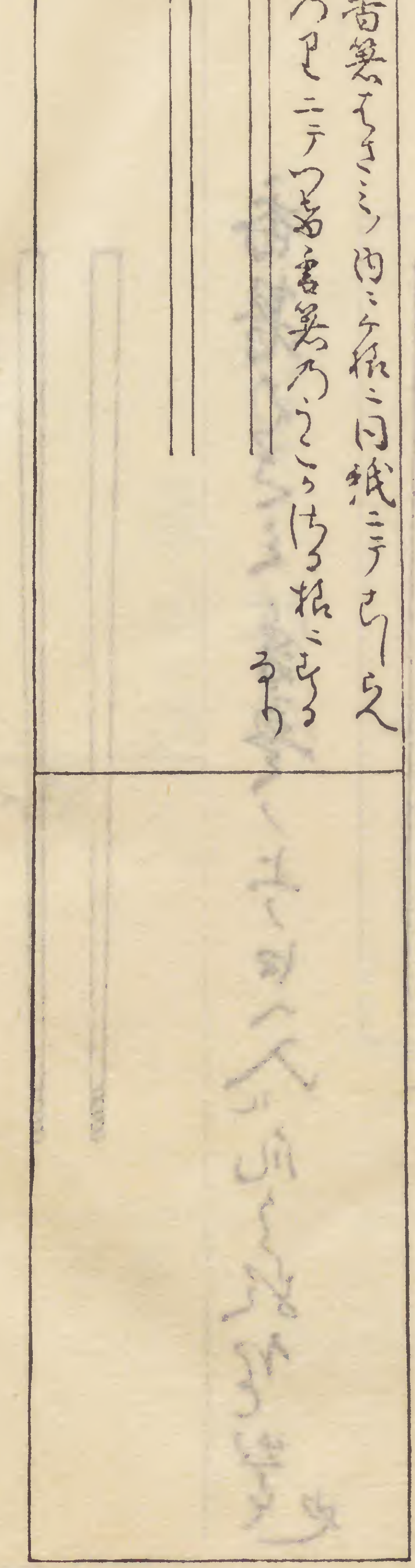
長サ四寸二分銀ニテ作ル口扇也ちやうに香をむすかけるやうにぬうてあるなり



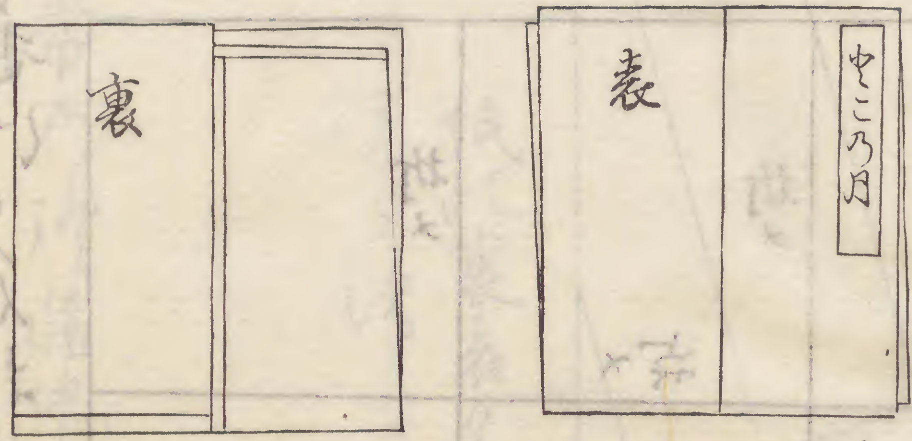
香箸たゝみ香包ノ上ノ口へ入ル図かくのことく出之也



香箸を包む折形

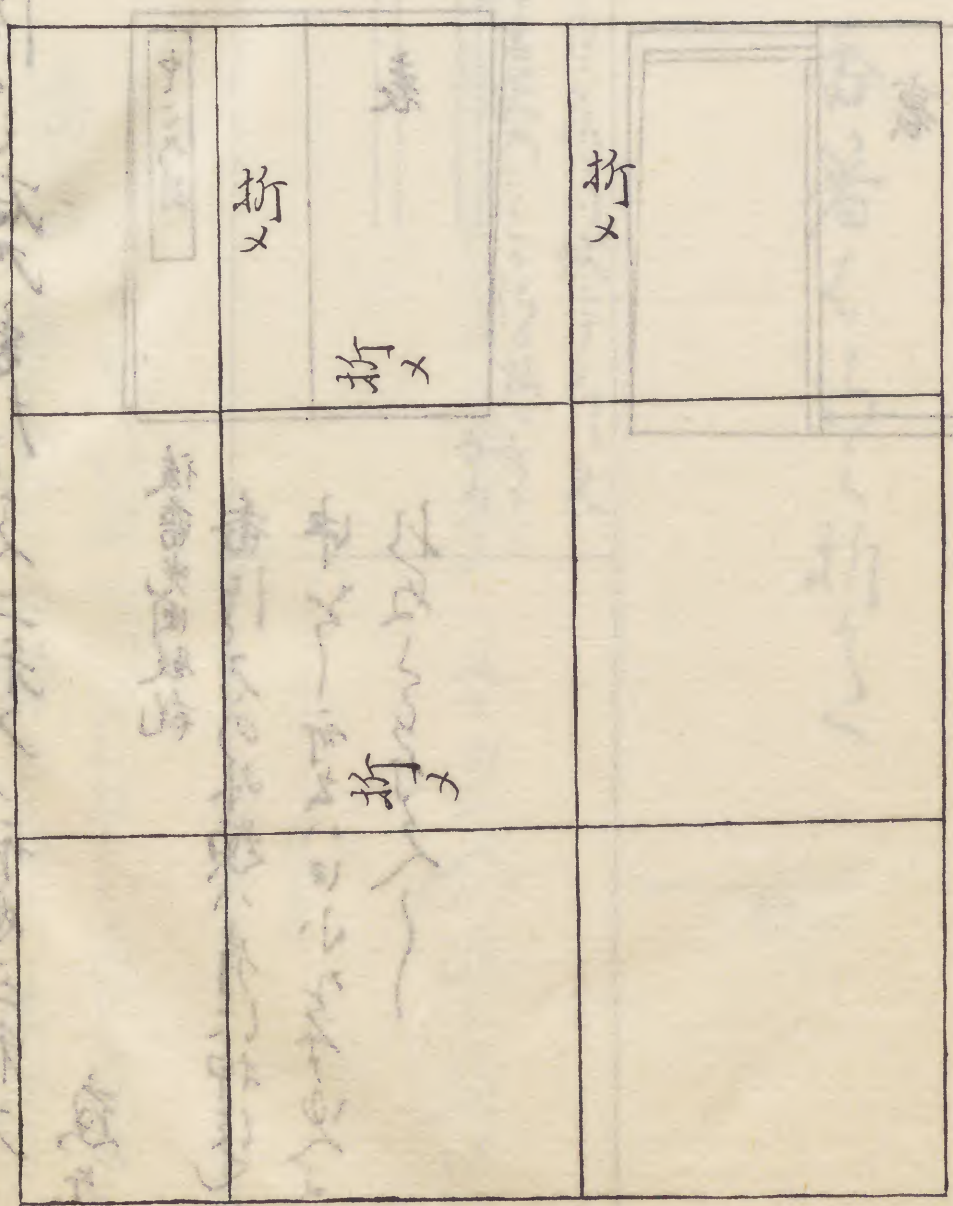


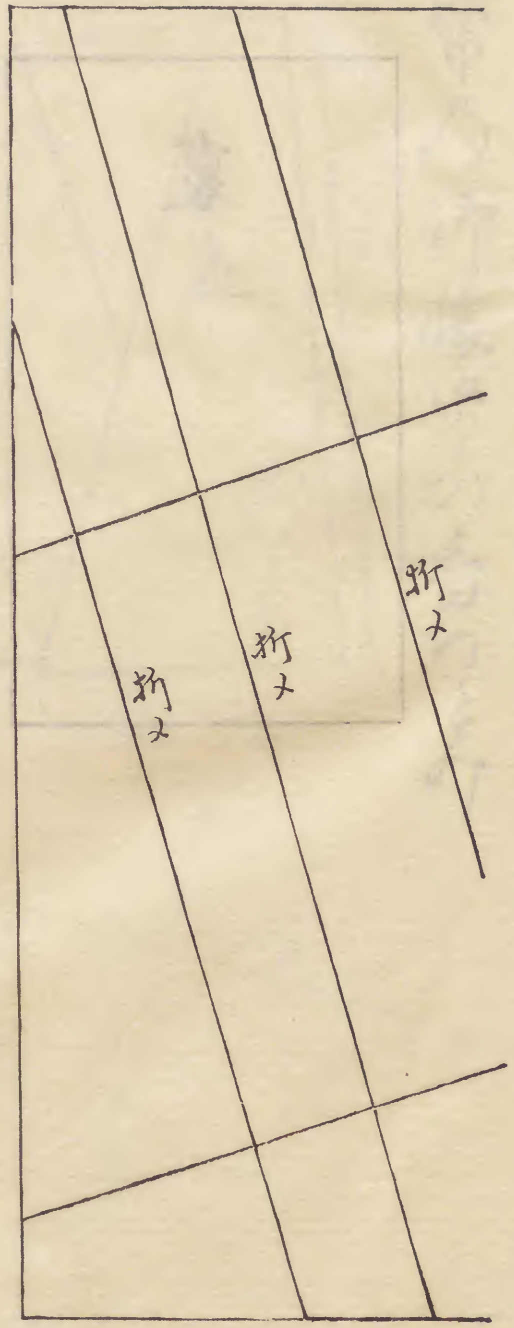
香包之右乃書たゝう又ハ二種入ノ形也三種入ハ
廣テ少也



後普光園殿説
香包の外類ハ肩に押包む物語ハ
中を少し開き八口小たてよ海ゝ
れぬことなきへし

香つゝみ折形

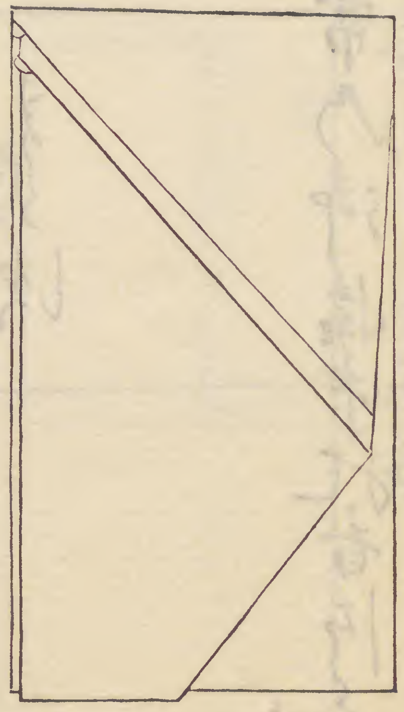




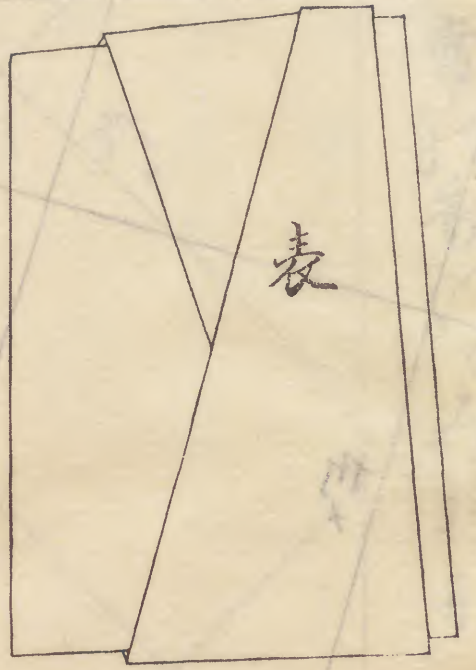
紙ハ裏表共にいろ〳〵かなり箔(ハク)の絵紙にて

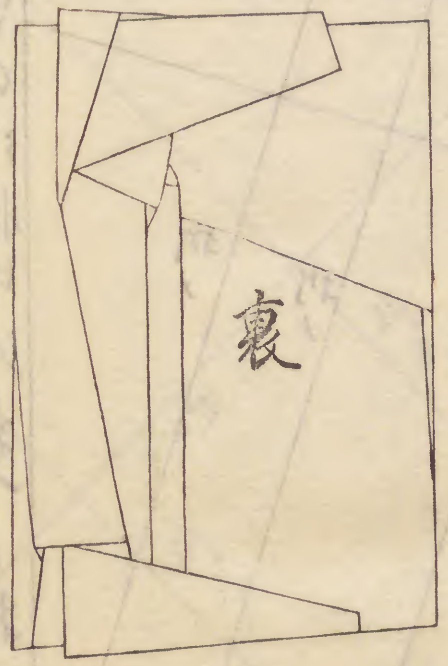
まへ次

常乃御懐中ハ香つゝみ也

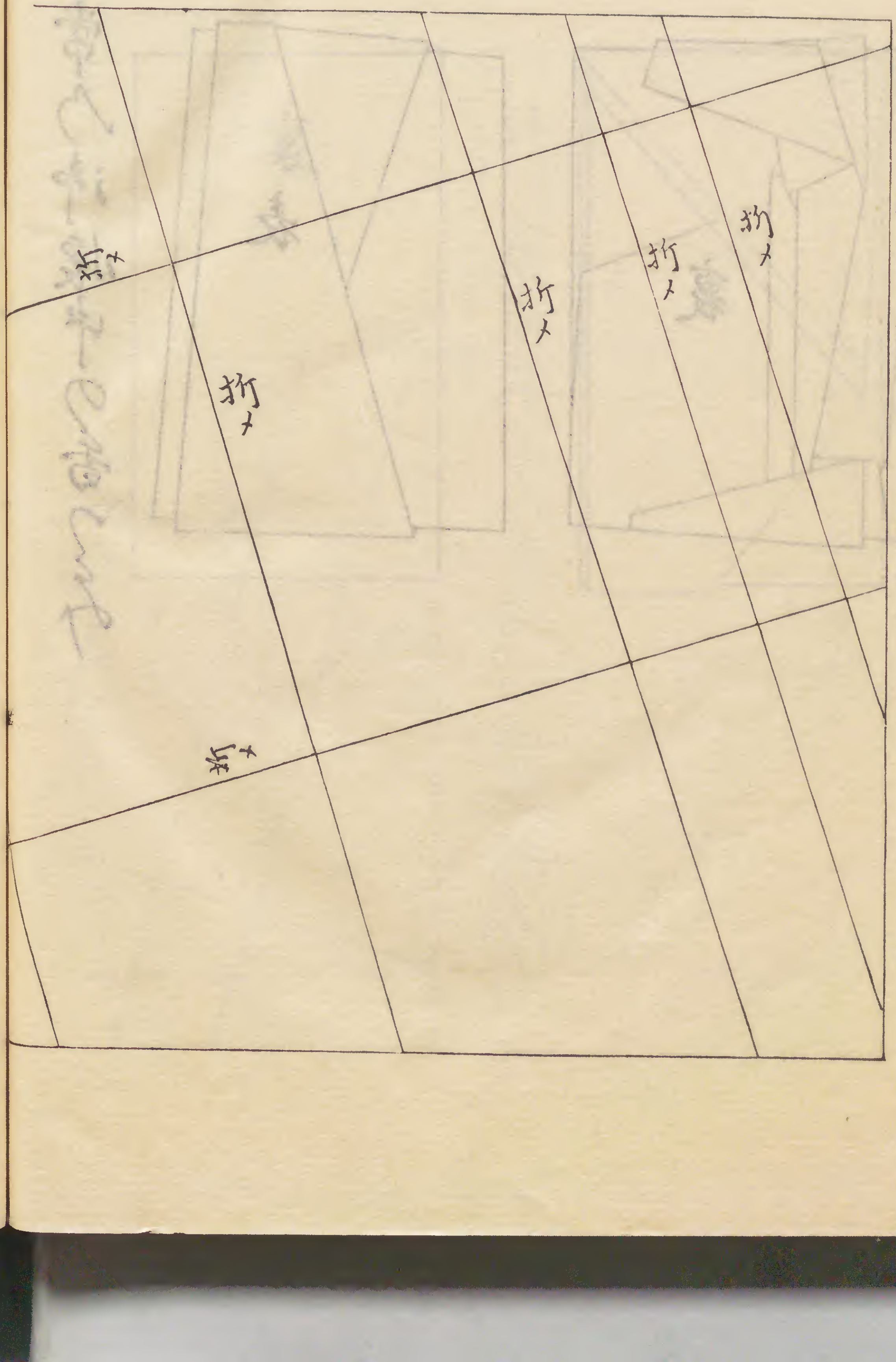


常乃御懐中の香つゝみ

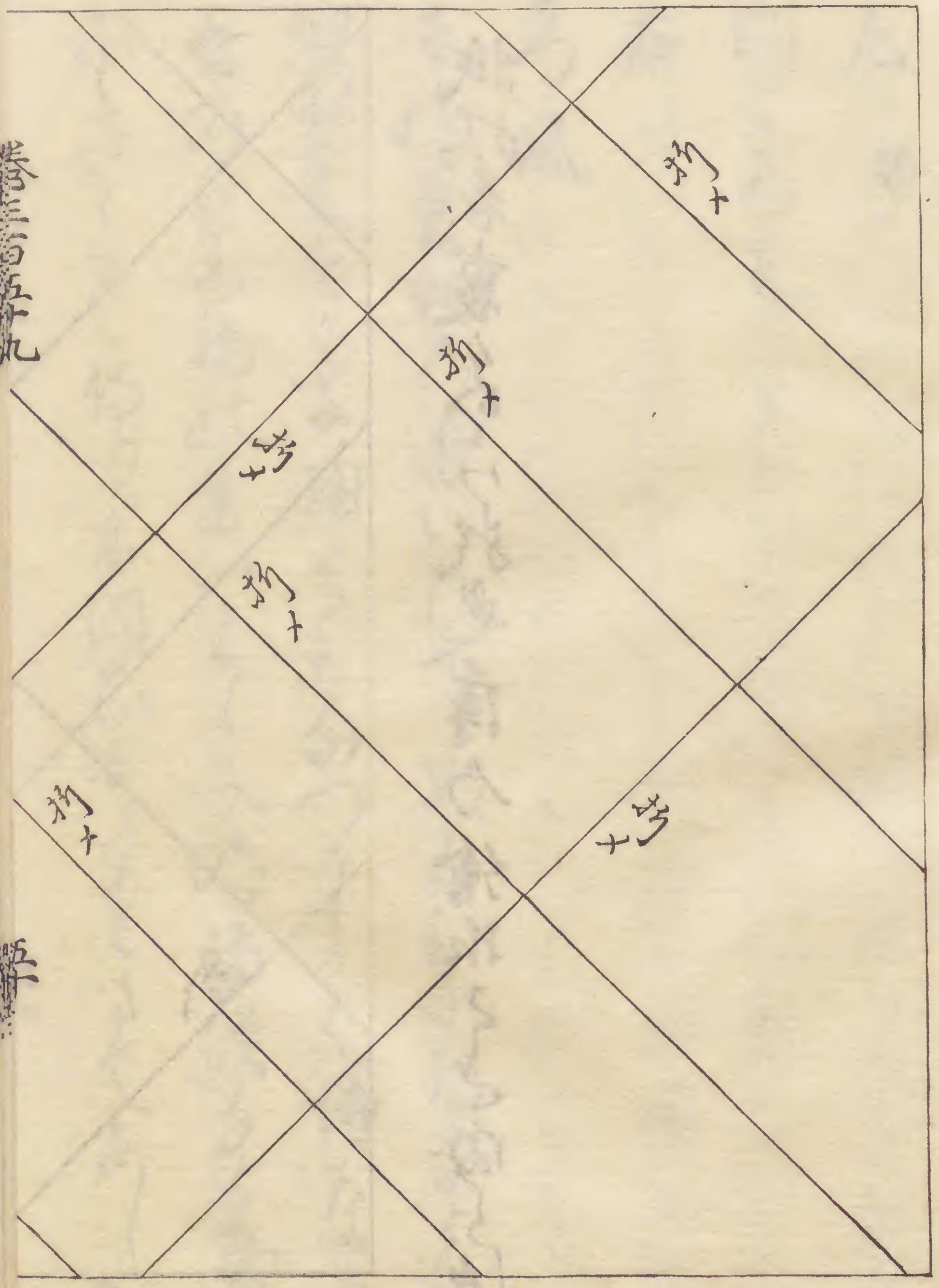




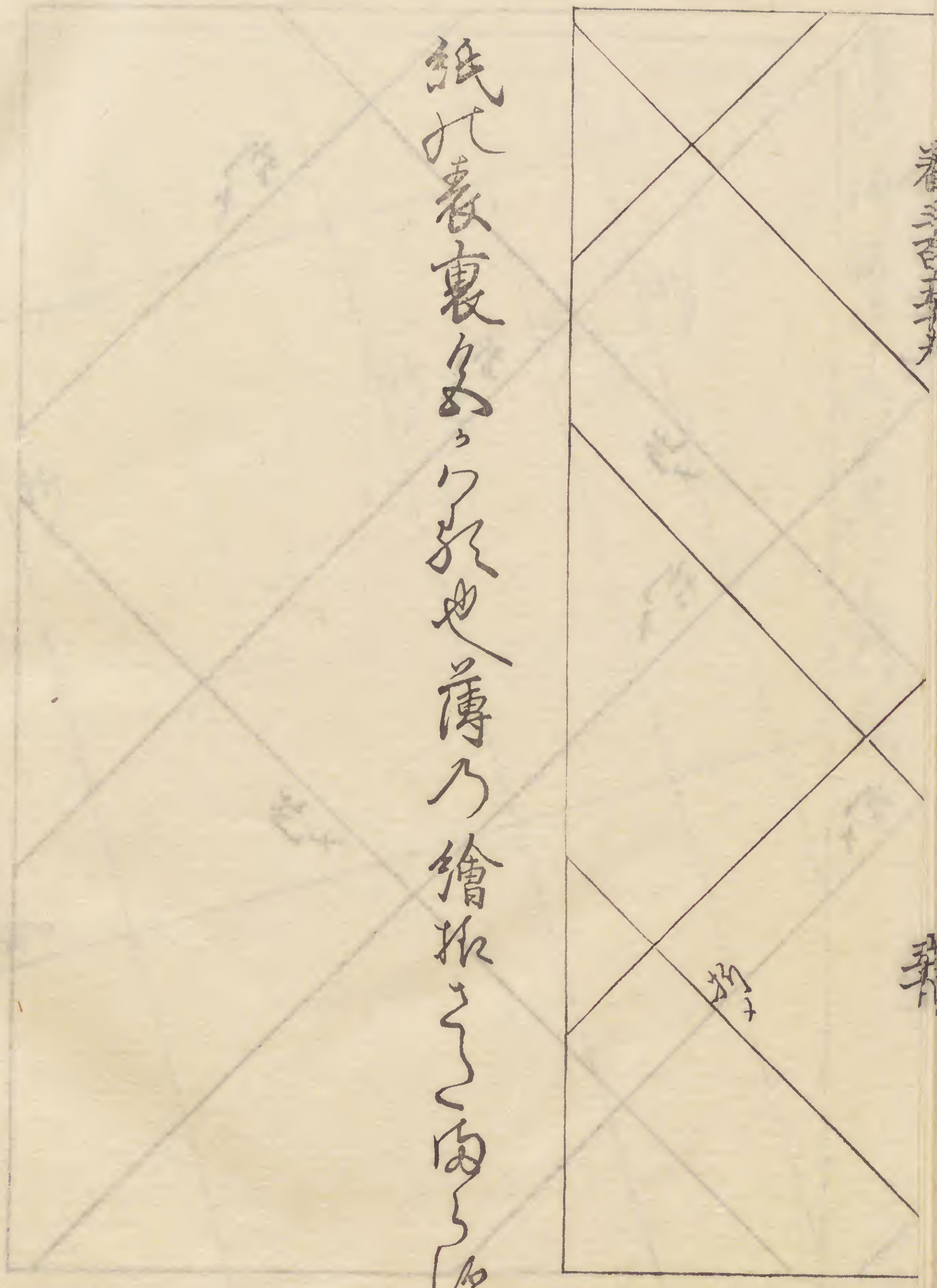
常の御懐中の香つゝみ折形



常の香つゝみ折形



紙の表裏多くハ形也薄乃繪抓さゝ内らへ



六種薫物合　文明十年十一月十六日
判飛儀祠書山賤後日書之

一番

左　勝

なつころも

右

まつ風

さの薫物乃香いひしらぬ句ひハ侍るを絹く
かねまとそう字ゆくくともあつうしく侍なり
右の薫物の香いましへ乃侍従なと庭う
かきてく侍りしけひともまそあしかう

国立公文書館
National Archives of Japan

すゝ志のまとい人々も庭に出て是ハ有しハ我
まさりにとかなる梅一トもとあり是ハ友に
無きことなく花々しく咲しか蕾の我めにく
かへりてしかくみるも御しくも名付ら
迷たりと一月小中上旬にいくとて申候
六歳つゝの梅ハすこうし乃ちとのあまりよ
梅の字ハ書風にてかな書け嘆こいふに
高ゆなるつくれ出り梅乃哥のよく葉也
一首ヲ我付てれいかしへよりまいひもお
知く事よりて御小敷もある人こゝと名申

御申しまた作者陳しけれ給けるくいしかれ悲
ごとも梅の咲申も皆悦とけ世あるまし
茶年御座ハす秋をもとにまひて梅の
人々よろこびのてひ我清きよろ
表をおもひてま云く名つる御ちうと
申ほの其時各なるうたよのたりに
申し候しそハ名にも悔く匪よにあら
決ゆ将しきまて候へし蔦物乃ゝさま
さりまたりくら字一番の花猪なりゝ
まへ御れぬ御申ゝうら

二番

左 持

やまひこ

右

まくれ露

左ハこゑのくよみて出はなと川ちく
袖さりしらんとて成るやうに宇津保物語右
の袖まよかれくの宜しからさくはほひのれ
つらしき風情あるなる歟左右いつせ
面白きかたとりかす左の仙人のとく座す人の

ゆかし袖にはぬれ衣にはなかくよみたるを
よ代をへぬ事し右歌くれつゆとゆかし
詞まて外国の本歌なく左方に同歌
出合事ゆ于色よりのつらし名なとせ
所右よりゆきるくハ仙人のきくの露
たる人なかれよくもこそゆゑ也きかく
くるせ申し侍るハきくの露とあまりて
ましうなる仙人と宮所よそしるなり
雲いひあらせおそれゆかし與へのつく
月のうよくほとなるぬ左方のあらそひ

つゝしむかたの心も勝まけおくなとも一首歌
同情ひとつゝある事ハめつらしく上果花
同等なる人さしも手情て見はらぬ

三番

左

いさまたも之ホ

右　勝

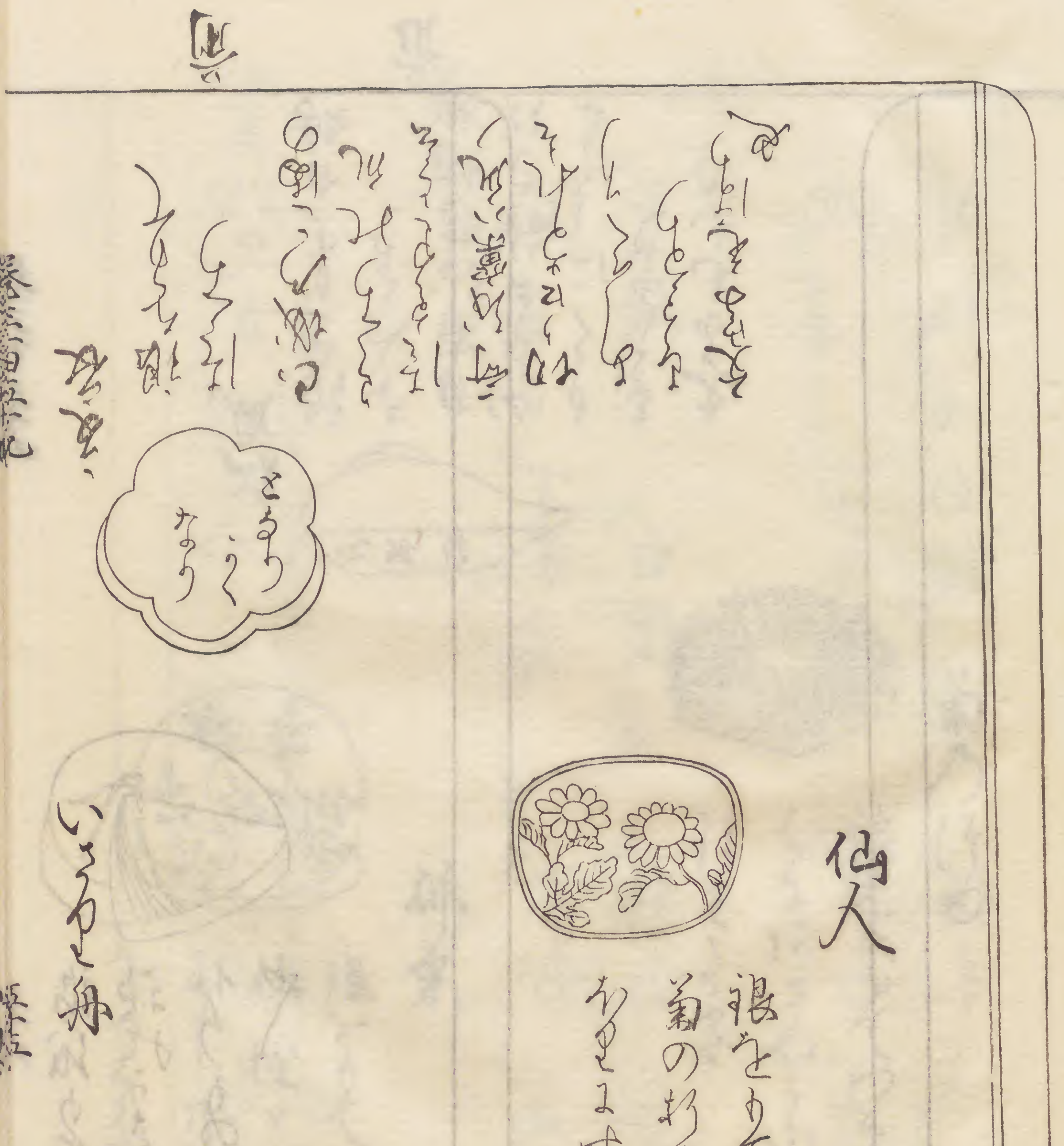
ほうきさく

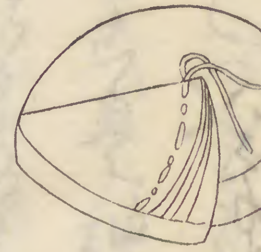
左乃まさくりのかいまかしうハ家やかく
歌人まもかれたまもあまかハいろ乃代まり

調人今世歌ある歌まやこの見ほひひあるか化
かすてかくきくあ左いふまし守ある
藻しほ火の煙すとらく伊勢物語
あるかなかりしに思ふさまなてきほのか
なかしこいふまくかせ見もおもしろく
也ひさかくらし高名付き後くなる家
顕するなまり古乃さうら記葉人にて〓　紀貫之
ありいろもこの代ぬきの哉をもなる歌や
人のとかくさつらんといふとりて名
付かれたる書しめまよるつまよあるか

ゑし龍髭なりといへとも柳葉の名
付られたるハたゞくさきを神祇祝乃ため
自然とこの道ハまよひたるなるへし名の物
たるなりける書にも勝れたる作り
なかなかなき

香盆香箱唐様
盆竪七寸二分横七寸八分高三分
四角両耳也梨子地但高足也

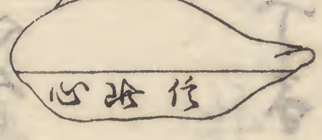




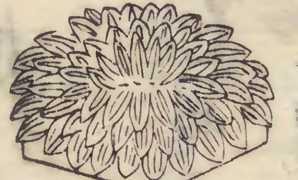
銀紙もて作る
袖たゝみまろ
ありあはするか
や

菓

松風



銀をもて白鴎
をつくり
自有沙鴎信州
心とは詩句を彫
かくにしてほり
まろみあり
文字毛わり



菊乃花

銀をもてつくり菜の
くるみにつきやうふるゝ
ほとよくまる

柳葉

銀をもてはなり
桂ノ枝ヲ毛なり
月ノくらゐ
をつくるや

薫物之方　たくえやう一二対ノ次第也遠ハ香かゝれ
りのくものくうつ行うちたる除べし

夏衣
一沉 四両　二丁子 二両　三甲香 一両二分
四薫陸 一分　五白檀 一両　六麝香 二分

仙人
一沉 四両　二丁子 二両　三甲香 一両二分
四甘松 一分　五白檀 一両二分　六柏木 一分 イ二分

いさよい舟
一沉 八両二分　二丁子 四両二分　三甲香 二両二分
四甘松 一両一分　五薫陸 一分

松風
一沉 四両　二丁子 二両　鬱金 二分二朱
四甘松 一分一朱　五排根 二分

きくの露
一沉 四両　二丁子 二両　三甲香 一両
四薫陸 一分　五甘松 一分　六麝香 二分

榊葉

一 沉 七両一分　二 丁子 二両二分（イ一分）　三 甲香 二両一分（イ一両）

四 霍香 一分二朱　五 白檀 一分一朱　六 甘松 一分

熟欝金 二分

去年此法まなひしめ合乃事おくり
まいらすへく（イ[illegible]し）

右五月雨日記以能勢頼寛屋代弘賢横田茂語蔵本校合了

名香合　志野宗信家

一番

左 逍遥　清偈信秀直　肖柏

右 中河　柏憲　大偈

むたり此香さるかりのときこえて荘子乃道
遥遊一篇心地をそへ乃行ゆかりいるやう
小侍ぬるてり古此中河文たるかやうにまち
いにしへかのこうち（小袿）よの人香を現しけら
おやうまおくゆかしけるまた桃花
一種くあやしさ昔此様よりそ居つし